

口 上

佐倉宗吾の名で通つて居る木内宗吾の傳記は、當時の領主堀田家及び其下役人共が、已れ等が悪政を掩はんとため、誣滅を計つたので詳細な事實は傳はらない相だ、又傳はつてゐた處で我々はそれを探究する様な、暇もなければ又金もない。それで本編は手近な材料の中から史實を求め、之れにチヨイ／＼傳説の綾を織り込んで書いて見た。

大正十一年一月

夢亭しるす

勞働講談叢書 第一編

勞働 犧牲者 宗吾

夢亭 生

(1) 郷宿久右衛門宅の談合
 行燈の火影薄暗い一室に、顔つき合せた六人の人々があつた。
 もう春に近いとは云へ、名物の關東の空風は遠慮なく雨戸の隙間から吹き込んで骨身に浸みこむ、それなのに彼等六人の間にはチトの火の氣もない、イヤ火の氣どころ

か、六人の手首には黒い冷たい鐵の錠がガツンリとハマ込れて居る。彼等は、法を犯せる者、即ち罪人なのだ。
 彼等は、食事と便所通ひのときだけ、宿場役人立會の上其恨めしい手錠から放たれる、そして臭い臭いモツン／＼飯と、一杯の水とで今

日まで命をつなぎ、堀に歩厚くなつた紙の様な蒲團にくるまつて、虱や蚤に責められながら、いつ放たれるともなき不安の身體を横たへ、眠りかぬる寒夜の夢に托して、村方の事ども、妻子や如何にと、焦慮するのみであつた。
 再び、彼を誘ふてサツト吹き付く